

令和3年度博物館協議会議事要旨

1 概要

日時：令和3年9月8日（水）13:30～16:00

開催形式：Webによるオンライン形式

出席者：委員：阿部会長、岩松副会長、井上委員、緒方委員、杉山委員、染川委員、
富田委員、針尾委員、三島委員、吉田委員（欠席：川津委員）

事務局：伊澤館長、小坪副館長、久保田普及課長、真鍋自然史課長、
日比野歴史課長ほか

- 議題： 1 令和2年度の事業実績について
（新型コロナウイルス感染防止対策を含む）
2 令和2年度の博物館評価について
3 令和3年度の事業計画について
4 20周年記念事業について
5 その他（意見交換）

傍聴者：1名

- 真鍋自然史課長より進行がなされた。
- 伊澤館長より挨拶がなされた。
- 今年度就任の吉田委員より自己紹介がなされた（今年度就任の川津委員は欠席）。
- 協議会会長・副会長が互選により選任された。
- 阿部会長・岩松副会長より挨拶がなされた。

2 議事

- 阿部会長の司会により議事がすすめられた。
- 事務局より議題1、2、3および4について説明がなされた。【 】は説明者
 - 1 令和2年度事業実績について【久保田普及課長】
 - 2 令和2年度の博物館評価について
 - ア 博物館自己評価について【日比野歴史課長】
 - イ 外部小委員会評価について【阿部会長】
 - 3 令和3年度の事業計画について【久保田普及課長】
 - 4 20周年記念事業について【久保田普及課長】

3 各委員による意見と質疑応答 ○委員 ●事務局

(1) 令和2年度事業実績について

- 春の特別展「私たち収蔵庫にいるんです」には、どのような層の方が入場されたのか。
- 春休みだったこともあり、小学生や未就学児連れの家族がたくさん来場された。

- 学校団体利用が昨年度比 18% (345 校) だったが、予想以上に多いように思う。
 - コロナ禍の前後で、来館者が博物館に求めるものが変化しているか。
 - コロナ禍における不規則な閉館・開館にもかかわらず特別展・企画展目当ての来館者が結構おられ、一定の評価を得られたという手応えは感じている。来館者が博物館に求めるものに変化があったようには思われない。
 - コロナ禍での特別展・企画展開催には苦労があったと推察する。
 - セカンドスクール事業はぜひ継続していただきたい。
 - シーダー活動の休止中のシーダーへのフォローアップはあったのか。
 - シーダーに対するオンラインによる講義などは実施していないが、自主研修として来館し展示を見ていただけるようにした。
 - 時間制の Web 予約システムの導入は円滑にすすんだのか、来館者への対応は必要だったのか。
 - 予想以上にスムーズに Web 予約システムを利用していただくことができた。パソコンやスマートフォンをお持ちで無い方に対しては、個別に対応を行った。
 - 博物館内に多種多様で膨大な数の資料が収集保管されていることを市民へリアルタイムで示すことで、市民の積極的な来館動機につなげることができると思う。
 - 報道機関への広報に加え、ケーブルテレビや地方局で博物館の展示物や取り組み、研究活動などを深く紹介する特番を企画し、放映することも検討してほしい。
 - より多くの市民が安心して来館でき、展示資料等の観覧や、様々な体験ができるようになることを期待している。
 - アフターコロナを見据えた教育普及活動の工夫、充実を期待する。
- (2) 令和 2 年度博物館評価について
- 令和 3 年 1 月に出了された中央教育審議会答申『『令和の日本型教育』の構築を目指して』を踏まえ、今後学校では分野横断型探求学習が導入される。博物館としても、それにどう対応していくか検討する必要がある。
 - 教育委員会の指導部および現場の教員の意見を聞きながら、検討していきたい。
 - 博物館 HP 内にある学校団体向け「館内見学について」のワークシートなどがとても使いやすいため、もっとアピールした方が良い。
 - ワークシートは学校団体向けに展開してきたが、個人利用者にも利用していただけるようにホームページでアピールしていきたい。
 - YouTube などでの発信は子供から大人まで新しい視点で楽しめ、次の来館に繋がるのではないかと感じた。学芸員は自分の専門分野の面白さを伝えて欲しい。
 - コロナ禍のなか、市民との対話をともなうボランティア活動は難しいが、紙芝居の YouTube 配信などのオンライン用コンテンツの制作に協力いただくことも考えらえる。
 - ぜひボランティアの協力をいただき、実施していきたい。
 - 入館時の検温、手指消毒の徹底、Web 予約システム、3 密を防ぐための館内利用などについてきちんと対策を取られているので、ホームページの「ご利用案内」のところに項目を起こしてわかりやすく提示されたほうが良い。
 - 安全に見学できるように実施しているコロナ対策を、よりわかりやすく伝えることのできる掲載方法を検討したい。
 - 北九州ミュージアムパーク創造事業は、国の補助金を活用した規模の大きい事業であり、事業内容と事業を通じて体现された価値が広く他の都市・他館に周知が図ら

れるようになっていくと思われる。自己評価や外部評価の対象とした方が良いと考える。

- 今後評価の対象になるように検討したい。
- 資料貸出件数が増加したことについて、コロナ禍におけるポジティブな面は考えられるのか。
- コロナ禍が資料貸出件数の増加の要因であることは考えにくいですが、研究者の研究時間が増加した可能性はあるかもしれない。

(3) 令和3年度事業計画について

- コロナ禍の緊急事態宣言下において特別展だけを開館することに関して、来館者の反応はどうだったのか。
- 常設展も開館して欲しいという要望は多く、特別展だけになると来館者は大きく減少した。
- 東京オリンピック期間中は、来館者の増減に変動はあったか。
- 当館の来館者数にオリンピック開催の影響は感じられなかった。

(4) 20周年記念事業について

- 20周年に際し、これまで一度も博物館に来館したことがない市民に、来館を勧める取り組みができると良い。
- 当館の新館オープン時には無料開放したこともある。今後どのような取り組みができるか検討していきたい。
- コロナ禍において、遠隔でイベント等を配信すると全国各地から参加することが可能となるので、20周年記念事業においても式典など遠隔配信を検討してほしい。
- 20周年記念事業として講演会やシンポジウムの開催を検討しているので、ウェブ開催についても考えたい。
- 開館して20年の間に博物館と関わった人達の思い出を集めるなど、博物館が人々に影響した部分を掘り起こしてはどうか。
- 現在はSNSなど双方向での通信が可能となっているので、博物館の思い出を募集するなど検討していきたい。

(5) その他の意見など

- SNSの投稿は利用者が積極的に調べないと見つけることができないため、Instagramのストーリーに広告を出すような取り組みが必要だと思う。
- 北九州市では子供の頃に博物館に行ったことがあるという大学生が多く、大学で歴史や自然の講義を聞いた後に博物館に行くと、また違った目線で展示を見ることができそうだと考えており、今後大学生が博物館に行くきっかけにもなるのではないだろうか。
- 地方や館種によって、コロナ禍での開館状況が様々であることに違和感を感じている。
- 北九州市民や北九州市に貢献する活動についての外部評価項目が少ない印象を受けた。今後、外部評価に北九州市立の博物館ならではの取り組みについて組み込んでいくと良い。
- 他県では博物館ネットワークという組織があり、博物館が中核となり様々な資料を学校に提供している。
- 学校教員は分野横断型学習、STEAM教育という言葉に敏感になっている印象である。この博物館は歴史と自然史両方がそろっているため、分野横断型学習(ST

EAM) の現場となり、モデルとなる可能性がある。これを新たなチャンスと捉えて欲しい。

- 今夏、ワークショップを実施した時に、多くの中高生が研究や科研費に興味を持っている印象を受けた。博物館で行われている研究についてのワークショップなどを実施すると、中高生の来館者獲得のきっかけとなるかもしれない。
- この施設には小学生の時に訪れ色々な学びを得ているが、中高生・大学生になると訪れる人も少なくなり、小学生の時の学びが次の学びに繋がってっていないことがもったいない。学芸員の研究に基づいたワークショップなどを開催し、中高生が日頃聞けない踏み込んだ内容についてリアルに学び、興味を引き出してもらえるチャンスがあると、学びに繋がったり、博物館への思いに繋がったりすると思う。
- 北九州市内の学校では、3年生から6年生まで1人1台タブレットが配布されている。専門家から直接話しを聞き、質問に答えてもらうというのは、子供たちの興味関心を高めることになると思うので、博物館と学校のオンライン授業を一緒にすすめてはどうか。また、教師の研修についてもオンラインでの実施を検討してはどうか。
- オンライン授業については、当館のミュージアムティーチャーを中心に実現できるように進めていきたい。
- 今年6月16日のすべての閣僚が参加する会議において、「女性活躍・男女共同参画の重点方針2021」というのが決定された。政府が主催または後援するシンポジウムや各種行事において、登壇者や発言者等の性別に偏りがないように努めることとする、また、地方公共団体に対して、各地方公共団体が主催、後援する行事等への男女共同参画の視点の反映について要請を行うという内容である。博物館でもシンポジウムの主催や後援を行う時に、このような視点は非常に大事だと思う。
- 真鍋自然史課長より会議の終了が宣言された。

(議事録作成：中西 希・太田泰弘)